

第七十一回県短歌大会選考結果

特別選「雑詠」

木村 雅子 氏 選

◎人 位

言い返す言葉を準備していたが空の蒼あおさにそつとのみこむ

八戸 月館 玲子

◎天 位

軽トラにチェンソーと鉦と祖母のせて山に枝うつを生業とせり

十和田 佐々木せつ子

【評】温かい人間味のある歌。林業をなりわいとしている作者が仕事場に祖母も

連れて行くのだろう。荷物を載せる、人を乗せる、というように「のせる」には二つの漢字があるが、軽トラには両方のせているので、ここではひらがな表記。よく考えている。

◎地 位

ヒマラヤのアンモナイトは海を恋い我は君恋い銀河を仰ぐ

三 沢 阿久津凍河

【評】君を恋う気持ち歌うのに、アンモナイトやヒマラヤを引き合いに出して

いる。結句の銀河でさらに広がる。君への思いが、時間的にも空間的にもスケールが大きく詠まれている。

◎秀 逸（5首）

【評】言い返す言葉は、客観的に相手が悪いという決め手となる。だが、言わなかった。空の蒼さを見ると、メンツのようなことは小さいことだと思っただろう。とても詩的な反応。

射爆場の砂地は燃えてなまぐさき有刺鉄線ひるがほさかす

六戸 古館 公子

ふるさとに残りて祭事を守らむか虫送りまつりに太刀振る子供ら

つがる 成田 みつ

老舗なる酒屋の土間の冷んやりに時を番する犬のまどろむ

弘前 山内 悦子

この野郎につくきお前に血はやれん子牛の蛇を素手でつぶしぬ

十和田 外山 國雄

困難の道選りし娘の暮らし訊く青葉の下に車を停めて

青森 竹洞 早苗

◎佳 作（20首）

「もうここにはいません」などと言わないでくれよと父母の墓の草とる

つがる 中村 雅之

祖父の金くすねて飴玉買ひし吾に無言の母の眼まなこを忘れず

青 森 木浪みつゑ

千年のいのちを鉄に吹き込むとふ鍛冶職人の夫も今は無く

五所川原 菊地 美絵

ぬか漬けの初もぎ茄子は紫の色鮮やかに夏連れて来る

鶴 田 下山 秀子

天の川織姫彦星渡りゆく年一度なら苦にもならず

青 森 櫻庭喜久枝

八十歳になりて見えくる大切を記して置かな 鉛筆けづる

青 森 山本 英子

モテ期なる話題に一瞬ドキリとすこの先あまりないのだけれど

青 森 太田恵美子

ぼっかりとザクロの花の咲きつつ廃屋のやねに花びらひかる

五所川原 吉田 勇蔵

うたを詠むわが海馬なり寒立馬かんだちめのやうにもあれよ晩節までを

弘 前 斉藤 純子

酔へばまたモトカノと呼ぶ同級生さうだったかしらと手を取り笑ふ

青 森 間山 淑子

装へる今宵の友の胸飾る琥珀に遠き世の蟻ひそむ

青 森 加藤 洋子

梳くたびの小櫛に余る白髪を手を労りて一日はじまる

平 川 工藤 チエ

長女なれば昔語りも遺言も洩らさず聞いておくことにする

青 森 今 貴子

少子化の波は来ていた高校にも閉校十二の計画突如

弘 前 赤坂千賀子

オニヤンマのように来て息子帰ったり糊を利かせる木綿のシート

十和田 星野 綾香

サングラスかけて拒否するものは何ショーウィンドーに私が映る

青 森 志村 佳

久々に夫と外食それぞれに好物食べつつ笑み交しあう

野辺地 作田 サキ

亡き父の一首を想へばかの庭はてつせん天まで咲きのぼるころ

青 森 兼平あゆみ

あつさりと散りしシクラメン夏に咲く咲けるとき咲くそれではないのだ

弘 前 神田 富恵

目がしらもまなじりも赤きネプタ絵の美女描き終へて筆洗ふ君

弘 前 中村 キネ

宿題 A 「水」

◎佳 作 (25首)

ごくごくくと水飲みたしといふ夫こぶし程残る胃をさすりつつ

青 森 安田 溪子

絵手紙の君の西瓜はたつぷりの水分含むごとくに涼し

弘 前 藤田久美子

岩木山に残りゐる雪のわづかなり花掛水は足りるだらうか

つがる 木村 茂子

峡田はさまだの代掻き水の治まれば影を映せし山桜の花

六ヶ所 三戸 源治

さり気なく茶碗を洗う手の中に悲しみあつめ水流したる

五所川原 高橋 藤花

十和田湖の水の深き藍の色にこもれる永遠とわの時間を見つむ

十和田 佐々木愛子

マチュピチュの用水技術の緻密さに驚嘆しつつシャワー浴びをり

む つ 高橋 昭一

米とぎし水捨てがたく庭畑の茄子むらさきの根に注ぎたり

弘 前 須藤まさえ

原爆のドームの脇に陽炎がたちて聞こえる「水をください」

十和田 星野 綾香

サッカーを終えて蛇口の水浴びる子の髪に散る光の欠けら

青 森 澁田 紀子

志村 佳氏 選

◎推 薦 (5首)

水の面を跳びたつ一瞬にびいろの鳥の細き身小柄こづかとなれり

弘 前 工藤まりゑ

ふるさとのフクシマ語る妻の手に氷解けゆく水割りの夜

青 森 森 純一

ゆるゆると夏の奥入瀬の水ほぐし梅花藻の花白く揺れいる

十和田 馬場 有子

「ただいま」と君が鎖骨で水を飲むクラス会より火照りを連れて

東 北 井上 健蔵

逃げ水のむこうにゆらぐ遠き日の日傘の人は誰であつたか

黒 石 澁谷 善武

自販機の「水」のボタンを押す時は後めたさをわずかに覚ゆ

おいらせ 齊藤三千代

この夏ではじけることも終わるのね水玉模様のカルピスソーダ

青森 柴崎 宏子

こくこくと飲干されたる今は水母の手足となれた二十年

青森 嶋村 静子

ほとぼしる水心地よく洗ひ終ふしその葉五百枚山をなしたり

弘前 菊池みのり

水色の空に夕べの月ありてなにやら嬉し朝の菜を摘む

十和田 福井 詳子

休耕田にやうやくこの春水張られ番のかるがも遊びてをりぬ

青森 木浪みつゑ

逃げ水を追ふもどかしさ直ぐ前の汝の傷みに届いてゐない

青森 山本 英子

恵山のぞむ春の水辺にドレミファソコクガン並ぶ音符のように

むつ 中村 笄子

咽ならしペットの水を飲みほして見上ぐる空に鯨雲湧く

六戸 安藤 トワ

一冊の本となりて立つ修司 小田内沼の水と照りあふ

つがる 兼平 一子

語り継ぐ原水爆の写真展人影まばらに心細りぬ

青森 三浦美英子

父と猫の遺影の前に置く水に氷をひとかけ浮かせて七月

青森 兼平あゆみ

忘れない「平和の泉」噴水の白く羽ばたく長崎の空

青森 野村優美子

高く低く夏空洗ふ噴水が風に揺れては子らと戯る

八戸 杉山 靖子

検索の宇宙ステーション小窓より水の惑星傾き映す

弘前 林 昭雄

野呂富枝氏選

◎推 薦 (5首)

メルトダウンの廢炉にたまりし汚染水聖なる水のごとくしづけし

つがる 中村 雅之

白神の雪どけ水を湛へたるダム的底ひに村のバス停が

弘前 工藤 邦男

さり気なく茶碗を洗う手の中に悲しみあつめ水流したる

五所川原 高橋 藤花

一冊の本となりて立つ修司 小田内沼の水と照りあふ

つがる 兼平 一子

水に生き水に死にたる人間の儚さを知る今日の朝刊

八戸 月館 玲子

◎佳 作 (25首)

ごくごくと水飲みたしといふ夫こぶし程残る胃をさすりつつ

青森 安田 溪子

竣工のダムの水面に滲引いて水上バスは人乗せめぐる

弘前 須藤 直助

羊水の中に浮かびて吾が胎児未来に生きる！小さな命

青森 新山 魏一

顔あらひ米を研ぎつつ九州の身重の母子を呑みしも水なり

弘前 山内 聖子

水分を摂ってもとつても取り切れぬ喉の渴きも心の飢えも

青森 太田惠美子

ぎらぎらと八月六日の陽は照りて庭の打水たちまち乾く

十和田 小山田信子

戦地にて水につかりて寝ねしゆゑと風邪ひく父がぼつりと言ひき

弘前 佐藤 啓子

水害に家を追われる人を見て焼け出された日の我を思えり

三沢 相坂 智子

生けるものの命をつなぐ聖なる水ときには貌を剥きだしにする

青森 佐藤ヨシミ

帰国して蛇口ひねれば飲める「水道水」もとの暮しに戻りし安堵

藤崎 清水 川魚

原爆のドームの脇に陽炎がたちて聞こえる「水をください」

十和田 星野 綾香

九州の洪水悲しむ傍らで猛暑和らぐ雨に喜ぶ

弘前 永井 怜

自販機の「水」のボタンを押す時は後めたさをわずかに覚ゆ

おいらせ 齊藤三千代

休耕田に有志ら育むわかさぎは水にきらめきえさうばい合

十和田 福井 元子

汚染から故郷の水を守らんと村の人等の団結堅し

十和田 生出 穎子

減反の土地を再び水田にもどしつがるロマンの出穂はじまる

十和田 小笠原さめ

泣いてたまるか老いてたまるか流れ落つ汗水ぬぐい鍬をふるいぬ

おいらせ 日野口和子

又ひとつ制御のできぬものを知る惨状残す水の暴走

青森 佐藤 東

ほとぼしる水心地よく洗ひ終ふしその葉五百枚山をなしたり

弘前 菊池みのり

水槽に右手を上ぐる調教師イルカは高くいつせいにとぶ

青森 菊地トシエ

水を得た魚の如く生き生きと一汗毎に子等の成長

佐井 渡邊 寂隆

父母ちちははを乗せてこぎ出す一艘の灯ろうの影水面にゆれる

十和田 田村 郁子

水揚げの帆立貝選る媪等の高らかな声朝空にひびく

青森 相馬富美子

どちらかが倒れるまでか日に六度水あらためて薬のませる

黒石 島田 興三

我が医院今閉ぢられてしまひしが時折蛇口の水流し廻りて

弘前 ふじさのりこ

千田節生氏 選

◎推 薦 (5首)

絵手紙の君の西瓜はたつぷりの水分含むごとくに涼し

弘前 藤田久美子

ふるさとのフクシマ語る妻の手に氷解けゆく水割りの夜

青森 森 純一

二歳児は水とおしゃべり一畳のビニールプールに一人浸りて

つがる 佐藤恵美子

水揚げの帆立貝選る媪等の高らかな声朝空にひびく

青森 相馬富美子

獺またぎ師より水に濯すすげる白神のわさび賜り噛めば清すがしき

三 沢 阿久津凍河

◎佳 作 (25首)

水の面を跳びたつ一瞬にびいろの鳥の細き身小柄こづかとなれり

弘前 工藤まり糸

六月の雨に膨らむレタス苗株切る両手に水の滴る

青森 鹿内 伸也

竣工のダムの水面に滲引いて水上バスは人乗せめぐる

弘前 須藤 直助

峡田はざまだの代掻き水の治まれば影を映せし山桜の花

六ヶ所 三戸 源治

宿題 A 「水」

水没の危機せまるといふ父果てし赤道直下のタラワ島訪う旅

野辺地 小橋 順子

水飲んでゐますか医師のこゑ洩れて順番を待つ椅子の閑かさ

七戸 大串 靖子

映像は福岡杷木の泥一帯 渴きし畑に水を撒く今朝

むつ 吉田 章子

水ふくみ土やわらかき樺林を風わたりゆく鳶の山々

十和田 佐々木せつ子

マチュピチュの用水技術の緻密さに驚嘆しつつシャワー浴びをり

むつ 高橋 昭一

「お父ちゃんと遊んだ記憶ない」と言ふ滝水のごと娘のことは打つ

青森 風張 景一

米とぎし水捨てがたく庭畑の茄子むらさきの根に注ぎたり

弘前 須藤まさえ

三十三度の猛暑つづくを生きてゆく子牛は喉を鳴らし水飲む

十和田 外山 國雄

ゆるゆると夏の奥入瀬の水ほぐし梅花藻の花白く揺れる

十和田 馬場 有子

休耕田に有志ら育むわかさぎは水にきらめきえさうばい合う

十和田 福井 元子

検査ゆえ水分絶ちいしわが身内医師のカメラはいく度もさぐる

十和田 田畑 律子

泣いてたまるか老いてたまるか流れ落つ汗水ぬぐい鍬をふるいぬ

おいらせ 日野口和子

水槽に右手を上ぐる調教師イルカは高くいつせいにとぶ

青森 菊地トシエ

水色のスカーフを軽く巻きながら雨洗いたる新緑街行く

青森 田中百合子

水、水とICUの夫が欲る 濡らせしガーゼ唇くちに含ます

青森 間山 淑子

何時の代の瞬き見するや樹幹流 水の輪廻を声なく調ぶ

弘前 木村 健悦

白神を洗ひ清めて冷え勝る暗門滝の飛沫を浴ぶる

八戸 三川 博

黄水仙花瓶に挿せばひんやりと孤のかなしみが流れはじめ

青森 志村 佳

父の庭継ぎゆく体力あと四五年長きホースを繰りて水撒く

青森 竹洞 早苗

口説物の影のひそめしじよんがらは「水がきれい…」と津軽を謡う

青森 川浪 祐子

検索の宇宙ステーション小窓より水の惑星傾き映す

弘前 林 昭雄

宿題B 「核」

◎佳 作 (25首)

まっ先に核ミサイルのとんでくる村の神社の真っ赤な鳥居

つがる 中村 雅之

いつよりか核家族化すすみ街なかに老の住みし廃屋めだつ

青森 山本 透青

日ぐらしの鳴く裏畑に核家族の汁の実にせん茄子二つもぐ

青森 安田 溪子

五十人の職場まとめる中核の君の姿のきりりとまぶし

十和田 中里茉莉子

悍しき核弾頭の報聞く朝ともあれ山畑の馬鈴薯に土寄す

青森 鹿内 伸也

核兵器の疑惑秘めたり基地のありいづこを指して飛ぶを恐るる

南部 根市 政志

集落の伝承信仰守らむと老等の核となりて門訪ふ

つがる 成田 みつ

反核の声張りデモの行進す若き日を知る赤き鉢巻

青森 加藤 洋子

核心に触れば全てが終るから誰も聞かない退会の理由

三沢 相坂 智子

心の核に守りいるペースメーカーはわれの玉手箱

十和田 佐々木せつ子

林 昭雄氏 選

◎推 薦 (5首)

北朝鮮の現実知らぬ国民は核兵器つくる裏もわからず

青森 宮崎 法子

DNA同じ核持つ子や孫に受け繋がるわたしの命

大鰐 澤 久枝

人好しと言はれつ祭りたばね来しこよい最後の核となりなむ

つがる 松橋 孝徳

荒れし生徒らの中核なりし君も五十歳初クラス会の知らせ持ちくる

黒石 加賀谷富美子

頭庇ひて核ミサイルの避難訓練こつけいにして厳しきうつ

青森 竹洞 早苗

宿題B「核」

きのふけふ手漉きの紙に鶴を折る核廃絶へ尽きせぬ祈り

青森 風張 景一

少年の核となりたる将棋さす藤井四段の記事が賑はふ

弘前 須藤まさえ

越して来て田圃の中に見し看板三十年前も「核燃まいね」

弘前 神田 富恵

核兵器を枕に眠るか北の国地球の嘆き聞こうともせず

十和田 小笠原としゑ

暗記する百人一首の韻律がわが核となり歌となるまで

青森 柴崎 宏子

高くなる降る雨の音五時過ぎて会議はようやく核心に入る

黒石 澁谷 善武

遠近に逃避訓練始まれど核兵器から逃れらるるや

弘前 菊池みのり

折り折りに聴こえて来るよ核家族犬と散歩を朝に夕べに

三沢 赤沼 淑子

折鶴に託した願ひ絶やすまじ核廃絶に集ふ人人

平川 成田 光雄

核家族の現象進み少子化は今や閉校地域をどよもす

青森 宮川 雅子

そうめんと鯖缶で今日は間に合ひぬ 何であったかわれの核心は

青森 山本 英子

むづかしき事は知らずもこの世界に核は要らぬと胸裡に思ふ

六戸 田中 密枝

核心を衝かれて一瞬うろたえる総理に騒めく日本の夏

青森 大坂 克子

何のための「核兵器」なかりセットのできない世界に生きてるくせに

八戸 月舘 玲子

争ひや核の無き世を願ひたり美しき岩木嶺夏空に聳ゆ

弘前 中村あやめ

日野口和子氏 選

◎推 薦 (5首)

まっ先に核ミサイルのとんでくる村の神社の真つ赤な鳥居

つがる 中村 雅之

いつよりか核家族化すすみ街なかに老の住みぬし廃屋めだつ

青 森 山本 透青

久びさに雨降る朝核のごみの処分地の記事繰り返し読む

む つ 立花 恵子

核心に触れざりし日よ編みかけのレースのモチーフ並べたりして

十和田 大野あつ子

核弾頭飛びしその日は気付かずスイカの手入れをしてる朝かも

鶴 田 下山 秀子

◎佳 作 (25首)

悍しき核弾頭の報聞く朝ともあれ山畑の馬鈴薯に土寄す

青 森 鹿内 伸也

一面に蒲公英の咲くこの広場地下には核の廃棄物眠る

弘 前 千葉 睦

核といふ魔物ひそかに眠らせて炎天に咲くひまはりの花

八 戸 木立 徹

地下深く核を埋むる六ヶ所のプールに息衝く遺場なきゴミ

青 森 齊藤 守

さくらんぼ食みたるのちのおちよぼ口核を飛ばしてはしゃぐ園児等

八 戸 栗谷川佑子

核のなき昭和のむつに蟹追ひき五歳の夏よ父母もあて

六 戸 梅村 久子

いつか来ん日の核心には触るるなく共に仰ぎをり娑羅の白花

十和田 小山田信子

核心を知る男あり 官僚の地位を捨てたる言葉は重し

青 森 今 貴子

核心に触れる議論はNGと空気読む人軽やかに言ふ

三 沢 宮崎とも子

がつつんと割りし胡桃に核ふたつ我が胸内に二心あるごと

む つ 高橋やす子

梨の実の核までしゃぶつた日のありき食料不足の終戦前後

野辺地 作田 サキ

暗記する百人一首の韻律がわが核となり歌となるまで

青 森 柴崎 宏子

折鶴に託した願ひ絶やすまじ核廃絶に集ふ人人

平 川 成田 光雄

核の傘要らぬ未来あれ日照り道笑ひさざめく下校の子らに

青 森 千葉 禎子

山があり谷あり人生歩み来て齢七十五今核家族

おいらせ 武田 裕子

出来ること 核兵器禁止の平和行進雨の峠道を黙々登る

田舎館 中村喜美子

そうめんと鯖缶で今日は間に合ひぬ 何であつたかわれの核心は

青森 山本 英子

古代智の顛末なりしか。核の火に灼き盡くされしモヘンジョ・ダロは

青森 木村 美映

なかなか核心に触れぬ集会にこのメンバーはこれでいらし

十和田 田村 郁子

核心にふれることなく会話する友の憂ひは今日はいづくに

青森 相馬富美子

問題の核心避ける姑ははと私ほろ苦き茶も笑みつつ含む

平川 工藤 チェ

敗戦を結核病棟に聞きしより苦悩の昭和生かされ傘寿

三沢 阿久津凍河

直球で核心ついてくる人にたじろいでいた十八の夏

青森 志村 佳

核心をつく意見にはまあまあとまずは一献懇親が先と

青森 三嶋じゅん子

争ひや核の無き世を願ひたり美はしき岩木嶺夏空に聳ゆ

弘前 中村あやめ

木村美映氏 選

◎推 薦 (5首)

核といふ魔物ひそかに眠らせて炎天に咲くひまはりの花

八戸 木立 徹

きのふけふ手漉きの紙に鶴を折る核廃絶へ尽きせぬ祈り

青森 風張 景一

核の傘そらにつるされ風ふけば今にも落ちてきそうな星夜

十和田 星野 綾香

そうめんと鯖缶で今日は間に合ひぬ 何であつたかわれの核心は

青森 山本 英子

暮れてゆく野に核となり立つ一樹あすも聞きくれよわれの繰り言

五所川原 山谷 久子

◎佳 作 (25首)

まっ先に核ミサイルのとんでくる村の神社の真つ赤な鳥居

つがる 中村 雅之

核の傘さしかけられて七十余年廃絶の声喉のんどつかに聞ふ

弘前 工藤 邦男

五十人の職場まとめる中核の君の姿のきりりとまぶし

十和田 中里茉莉子

一面に蒲公英の咲くこの広場地下には核の廃棄物眠る

弘前 千葉 睦

わが家の核となる子のたくましく夏の陽のもとぶらんこ漕ぎをり

青森 大里 啓子

運動会の昼食時に広げたる新聞に踊る核という文字

五所川原 野呂 富枝

さくらんぼ食みたるのちのおちよぼ口核を飛ばしてはしゃぐ園児等

八戸 栗谷川佑子

人好しと言はれつ祭りたばね来しこよい最後の核となりなむ

つがる 松橋 孝徳

反核の声張りデモの行進す若き日を知る赤き鉢巻

青森 加藤 洋子

核心を知る男あり 官僚の地位を捨てたる言葉は重し

青森 今 貴子

核心に触れる議論はNGと空気読む人軽やかに言ふ

三沢 宮崎とも子

暗記する百人一首の韻律がわが核となり歌となるまで

青森 柴崎 宏子

高くなる降る雨の音五時過ぎて会議はようやく核心に入る

黒石 濫谷 善武

核心に触れざりし日よ編みかけのレースのモチーフ並べたりして

十和田 大野あつ子

流水の海にぼつりと核灯しひらひら泳ぐハダカカメラガイ

青森 間山 淑子

いざ打たん核なき世への鉄の門拳に赤き血のにじむとも

黒石 島田 興三

恐山の極楽浜に核事故の慰霊碑ゆめに立つことなかれ

八戸 三川 博

敗戦を結核病棟に聞きしより苦悩の昭和生かされ傘寿

三沢 阿久津凍河

息絶えし弟背負う少年の目写真は語る核がしたこと

十和田 芳賀裕美子

よく熟れた八助梅の核のぞきゆるりゆるりとジャムを仕上げる

おいらせ 苫米地昭子

核弾頭実戦配備ま近とやしみじみと見きわが掌の折鶴

弘前 横山 祥子

何のための「核兵器」なかりセットのできない世界に生きてるくせに

八戸 月舘 玲子

周辺をさまよふふたり核心に触れずコーヒータムは終はる

青森 兼平あゆみ

辞書に引きネットに調べて得心のゆかぬ核なり北辺に住みて

つがる 山下 敬子

争ひや核の無き世を願ひたり美しき岩木嶺夏空に簞ゆ

弘前 中村あやめ

席題「道」

◎秀 逸 (5首)

行く道に小さな薔薇が咲くと決め歩みはじめた君との暮らし

青森 澁田 紀子

行く道もきつと果てますいつの日かご一緒しましょう途中だけでも

青森 三嶋じゅん子

絹の道はるばる来たる玻璃の壺母胎のごとき膨らみもてり

弘前 藤田久美子

終点がミサイル基地の屏風山メロンロードは ただ一直線

つがる 中村 雅之

渾沌と衝突の世なり何ゆえにいつか来た道ひとは行くのか

黒石 島田 興三

平井軍治氏 選

◎推 薦 (3首)

・天 位

いばら道あへて選ぶは吾に似る一途なる娘を励ましゆかむ

青森 竹洞 早苗

・地 位

難病の息子に今日も言い聞かすお前のための道はあるから

十和田 田村 郁子

・人 位

歩きたい道まだ見えぬ十七の吾子と佇むひまわり畑

八戸 月館 玲子

◎佳 作 (20首)

何やある「啞ーア啞ーア」と横断歩道足早にくる嘴細鴉

弘前 工藤 邦男

足早に過ぎたる如き子育てを思ひつつゆく萩の咲く道

青森 安田 溪子

勾配の彼方に光もとめつつ魁夷歩みし種差の「道」

八戸 木立 徹

雨の日も晴天の日も他になしこの道こそが人生の友

青森 八木澤節子

間をおいて音聴こえくるキッチン水道の口にひかる水滴

八戸 栗谷川佑子

出揃ふも垂れぬ稲穂を憂ひつつ山背吹き抜く畦道を行く

つがる 成田 みつ

熊除けの鈴ひびかする旅人の近づきてくる鳶の森道

十和田 佐々木せつ子

報道の世に身を置きて四十年に時代の証言者なり得しかわれ

青森 森 純一

あこがれて通いつめたる学び舎の道端に揺るる藤の一房

十和田 佐々木愛子

雨音にぼろぼろこぼす感情を横断歩道の足音が消す

十和田 星野 綾香

亡父と我道産子なれば似てゐるとますます思ふ歳重ねつつ

弘前 神田 富恵

喪つた銀河鉄道の乗車券私は行けないカンパネルラよ

青森 柴崎 宏子

人に会うために道があると言われしもしみじみと見る村の一里塚

十和田 福井 詳子

吐く息が吹き出しのごと通勤の人ら行き交ふ朝の凍道

おいらせ 佐々木とも子

土にまみれ農する父母を嫌ひしに野菜を作り同じ道ゆく

六戸 安藤 トワ

ゲームしてスクールバスに通う子ら「道くさ」という言葉を知らず

十和田 芳賀裕美子

流し踊りの袂あでやかふるさとの後輩たちがゆく潮風の道

つがる 兼平 一子

まっすぐに帰りたくない夏の夜の道草ひとりコンビニへ入る

青森 志村 佳

人道に反する罪を言ふならば核兵器などあつてはならじ

神奈川県 木村 光雄

亡き父が先を歩いてゐるやうなふるさとの道を登る八月

青森 兼平あゆみ

三川 博氏 選

◎推 薦 (3首)

・天 位

金色と真白に光るひつじ雲津軽の空に大き道見ゆ

弘 前 横山 祥子

・地 位

九十歳何がめでたい惚^ぼけ初^そめし母は日暮れの道をさまよふ

青 森 齊藤 守

・人 位

躓いてみたいんですねハイヒール風にひゆるりと揺れる三叉路

東 北 井上 健蔵

◎秀 逸 (5首)

絹の道はるばる来たる玻璃の壺母胎のごとき膨らみもてり

弘 前 藤田久美子

行く道に小さな薔薇が咲くと決め歩みはじめた君との暮らし

青 森 澁田 紀子

土にまみれ農する父母を嫌ひしに野菜を作り同じ道ゆく

六 戸 安藤 トワ

行く道もきつと果てますいつの日かご一緒しましょう途中だけでも

青 森 三嶋じゅん子

坂道をまがれば景色かわりつつ山里を去る母を乗せゆく

青 森 野村優美子

◎佳 作 (20首)

終点がミサイル基地の屏風山メロンロードは ただ一直線

つがる 中村 雅之

アカシアの並木のかげを深くして峽の舗道に夏しぐれ降る

青 森 鹿内 伸也

終戦日来るたび思ふ平和とは九条守れ子孫の道を!!

青 森 新山 魏一

勾配の彼方に光もとめつつ魁夷歩みし種差の「道」

八 戸 木立 徹

歩き越しあなたとの道しあわせを求め得られて悔いなき日日に

弘 前 太田 弘子

検査後の異常なしとの帰り道芒のそよぎ眩しくありて

六 戸 梅村 久子

最優秀は北村麻子の紅葉狩三百年の歴史に女性おんなの道ひらく

む つ 吉田 章子

わがひとよ一生ひと筋につづく道ありていつくの辺りや七十路迎ふ

弘 前 佐藤 啓子

この夢は幾度も見たな道に迷う吾は何処いずこへ行きたいのだろ

青 森 今 貴子

寺庭の草抜く日課もわが道と思ひばただに素直でありたり

弘 前 須藤まさえ

長雨にくずれし土砂に塞がれて往来ならぬ災害の道

十和田 宮原 久美

工藤せい子氏 選

◎推 薦 (3首)

友の言ふ弱味も辱もさらけ出し戯れ歩く道も有りやと

三 沢 村岡 幸子

・天 位

絹の道はるばる来たる玻璃の壺母胎のごとき膨らみもてり

ほのかなる香り流れきてリラと知り夜の歩道にしばし佇みぬ

青 森 津島 妙子

弘 前 藤田久美子

看護師の見習い実習生の娘が地吹雪の道寡黙に帰り来

おいらせ 日野口和子

・地 位

終点がミサイル基地の屏風山メロンロードは ただ一直線

つがる 中村 雅之

碎かれし自負もてあまし佇つわれを救ひてくれしよ夕やけの道

五所川原 山谷 久子

・人 位

土にまみれ農する父母を嫌ひしに野菜を作り同じ道ゆく

ゲームしてスクールバスに通う子ら「道くさ」という言葉を知らず

十和田 芳賀裕美子

六 戸 安藤 トウ

流し踊りの袂あでやかふるさとの後輩たちがゆく潮風の道

つがる 兼平 一子

砂利道の蛇にも怖れず父のもと朗報抱き走ったあの日

青 森 川浪 祐子

亡き父の人の道説く言わざは今も心の糧となりたり

青 森 三浦美英子

難病の息子に今日も言い聞かすお前のための道はあるから

十和田 田村 郁子

部活やめ道をさ迷う男孫ぼつりと夢を夫に打ち明け

青 森 大坂 克子

つつましき十五歳棋士藤井四段険しき道に駒と遊べり

青 森 佐藤ヨシミ

稲の花甘く匂へるふるさとの畦道行けば父母の顔ちくる

弘 前 中村 キネ

僧侶らの墮落止まずと言ふガイド大雁塔の道を案内す

青 森 風張 景一

三陸の精霊しょうりょうばつた蛸たこ海へ飛び鎮魂の道歩めば芒

三 沢 阿久津凍河

◎佳 作(20首)

何やある「啞ーア 啞ーア」と横断歩道足早にくる嘴細鴉

弘前 工藤 邦男

七つの子いづこに置いてきたのやら 道のまなかに餌うばひあふ

弘前 工藤まりゑ

足早に過ぎたる如き子育てを思ひつつゆく萩の咲く道

青森 安田 溪子

ひたすらに米の集荷の道七十年地元の力をとりはけ思ふ

中泊 宮越恵美子

八十二今日の二十七誕生日ゆく道さがしゆるりと進まむ

南部 根市 政志

検査後の異常なしとの帰り道芒のそよぎ眩しくありて

六戸 梅村 久子

茫茫と穂すすきの道暮れゆきて核燃基地に灯るオレンジ

南部 八木田順峰

寺庭の草抜く日課もわが道と思ひばただに素直でありたり

弘前 須藤まさえ

東山魁夷の「道」を思いつつ姉と歩めり明るき方へ

深浦 佐藤 宏子

行く道に小さな薔薇が咲くと決め歩みはじめた君との暮らし

青森 澁田 紀子

亡父と我道産子なれば似てゐるとますます思ふ歳重ねつつ

弘前 神田 富恵

躓いてみたいんですねハイヒール風にひゆるりと揺れる三叉路

東北 井上 健蔵

三方の屍るいるいとインパール作戦の道日本兵嗚呼

弘前 菊池みのり

ドリンク剤の空きビン車内に轉がりぬ。この道どこまで走れるだらうか

青森 木村 美映

碎かれし自負もてあまし佇つわれを救ひてくれしよ夕やけの道

五所川原 山谷 久子

流し踊りの袂あでやかふるさとの後輩たちがゆく潮風の道

つがる 兼平 一子

部活やめ道をさ迷う男孫ぼつりと夢を夫に打ち明け

青森 大坂 克子

歩きたい道まだ見えぬ十七の吾子と佇むひまわり畑

八戸 月舘 玲子

行く道もきつと果てますいつの日かご一緒しましょう途中だけでも

青森 三嶋じゅん子

凸凹の道はずれゆく米朝よ幸せこめるミサイル射て

弘前 林 昭雄

加藤捷三氏選

◎推 薦 (3首)

・天位

難病の息子に今日も言い聞かすお前のための道はあるから

十和田 田村 郁子

・地位

茫茫と穂すすきの道暮れゆきて核燃基地に灯るオレンジ

南部 八木田順峰

・人位

検査後の「異常なし」との帰り道芒のそよぎ眩しくありて

六戸 梅村 久子

◎秀 逸 (5首)

雨音にぼろぼろこぼす感情を横断歩道の足音が消す

十和田 星野 綾香

生きてきた八十余年のわが道よ可となしゆかん命あるまで

おいらせ 苫米地昭子

つつましき十五歳棋士藤井四段険しき道に駒と遊べり

青 森 佐藤ヨシミ

長雨にくずれし土砂に塞がれて往来ならぬ災害の道

十和田 宮原 久美

火葬場に向かう車の道すがら白き木槿むくげに悲しみの湧く

青 森 泉 正彦

◎佳 作 (20首)

絹の道はるばる来たる玻璃の壺母胎のごとき膨らみもてり

弘 前 藤田久美子

十八歳じゅうはちの君知ってますか卒業をくり上げ戦いくさへと歩みゆく道

野辺地 小橋 順子

夕陽浴びアップルロードを越えて行く君への愛を携へながら

弘 前 村元 綾子

九十歳何がめでたい惚ぼけ初はつめし母は日暮れの道をさまよふ

青 森 齊藤 守

間において音聴こえるキツチンの水道の口にひかる水滴

八戸 栗谷川佑子

出揃ふも垂れぬ稲穂を憂ひつつ山背吹き抜く畦道を行く

つがる 成田 みつ

熊除けの鈴ひびかする旅人の近づきくる鳶とびの森道

十和田 佐々木せつ子

電話なき幼き頃の事づけは暗記繰り返し二里の道行く

黒 石 齋藤 慧子

あこがれて通いつめたる学び舎の道端に揺るる藤の一房

十和田 佐々木愛子

過ちのなきかと来し道振り返る傘寿を過ぎて落ちつきし今

弘 前 傳法 けい

初めての歌会へ気のたかぶりて駅より歩く道のり遠く

三 沢 赤沼 淑子

窓外に目を遊ばせてバスの旅糸のころぐさの揺るる道の辺

十和田 大野あつ子

坂道を登り詰めたる夏空になほたちのぼるアカシアの香が

青 森 山本 英子

菅井真澄も歩きしとふ道に出づ木々うつそうと暗門の上

青 森 間山 淑子

渾沌と衝突の世なり何ゆえにいつか来た道ひとは行くのか

黒 石 島田 興三

土にまみれ農する父母を嫌ひしに野菜を作り同じ道ゆく

六 戸 安藤 トワ

いばら道あへて選ぶは吾に似る一途なる娘を励ましゆかむ

青 森 竹洞 早苗

行く道もきつと果てますいつの日かご一緒しましょう途中だけでも

青 森 三嶋じゅん子

砂利道の蛇にも怖れず父のもと朗報抱き走ったあの日

青 森 川浪 祐子

稲の花甘く匂へるふるさとの畦道行けば父母の顔ちくる

弘 前 中村 キネ

